説教資料５　説教　原罪

「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」（創世記６章５節）

序

1　この聖句の見解は、人があらゆる世代にわたって描いてきた人間の本性から、なんと大きくずれていることでしょう。古代の人々が書いたものの多くは、人間の尊厳に関する楽観的な記述で満ちています。その人間の本性に関して、ある人々は人間を構成している気質の中に、あらゆる徳目と幸福があるかのように描いています。しかも、それは他のいかなる存在の恩恵を受けずにそうであるというのです。まさにうぬぼれの強い自己充足感であり、人間は自分の蓄えだけで生きていくことができ、神ご自身と何ら遜色のないものとします。

2　理性というかすかな光によって探求を導かれた異邦人だけが､そのような考えをもっただけでなく、キリストの名を帯び、神のみことばをゆだねられている者の中でも多くの者が、人間の本性に関して何か荘厳なもののように述べてきました。こうした類の説明は、今の時代に特に増えています。

しかも、それは世界のどの地域よりも、私たちの国において顕著です。この点で、博識で広範な学びをした人の中で幾人かが、その全力を傾注して、自分たちが「人間性の清らかな側面」と称するものを示そうとしました。もし人間というものに対する彼らの説明が正しいとするなら、人は「御使いよりもいくらか低くされた」もの、あるいは（文字通りに訳すと）「神よりもいくらか低くされた」ものと認められなければなりません。

3　これらの説明が、大多数の人々に非常に容易に受け入れられたとしても、少しも不思議ではないでしょう。なぜなら、だれでも自分自身を好ましく考えるように説得され易いからです。ですから、この類の著者たちは、ほぼ全世界で読まれ、尊敬され、称賛されています。そして、彼らが心を捕えた人の数は数えきれないほどです。大衆ばかりではなく教育のある人々にも同様です。そのように、今日、それと違ったことを語るのは、きっと好感を持たれないことです。人間の本質を非難することになるようなことを語ることは、喜ばれません。その人間の本質は、いくつかの欠点にもかかわらず一般的に、非常に汚れが無く、賢く、また徳の高いものとして認められているからです。

4一方、私たちは聖書をどうすべきでしょうか。聖書は、こうした考えに全く同意できないからです。それらの説明は、どれほど血肉に喜ばしいものであったとしても、聖書とは全く相容れないものです。聖書は、「ひとりの人の不従順によってすべての人が罪人となった」（ロマ５章１９節参）と断言し、「アダムにあってすべての人が死んだ」（Iコリ１５章２２節）ので、霊的に死んだものであり、いのちと神のかたちとを失ったと断言しています。堕罪後の罪深い魁ダムは、それから「彼のかたちどおりの子を生んだ」（創世５章３節）のです。彼にはそれ以外にどんな可能性があったでしょうか。なぜなら、「き

よい物をけがれた物から出せましょうか」（ヨブ１４章２２節）。結果として、この私たちも他の人々同様に、「生まれながら」（エペ２章３節）「罪過と罪との中に死んでいた者」（エペ２章１節）であり、「この世にあって望みもなく、神もない人」（エペ２章１２節、「怒りの子」（エペ２章３節、６章４節参）ということでした。すべての人は、「私は答ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました」（詩篇５１篇５節参）、「何の差別もありません。すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない」（ロマ３章２２節）ということができます。創造された神の栄光に満ちたかたちを受けることができないのです。それ故、「主は天から人の子らを見おろされた」とき、主は「彼らがみな、離れて行き、だれもかれも腐り果て、善を行う者がいない、ひとりもいない」、「神を尋ね求める」者がひとりもいない（詩篇１４篇2～3節参）のをご覧になった。これは、先に引用した聖句の中で、聖霊によって宣言されていることと全く一致しています。以前神が天から見おろされたとき、「主は、地上に人の悪が増大しているのをご覧になった」のです。その悪の増大ぶりは、「その心に計ることがみな、いつも悪いことに傾く」（創世６章５節）ほどでした。

これが、人に関する神の説明です。そこから私は、第一に、大洪水の前の人間がどうであったかを示します。第二に、人が今も同じでないかどうか探求します。そして第三に、いくつかの結論を導きます。

1　私は第一に、聖書のみことばを開きながら、大洪水の前の人間がどうであったかを示すことにします。そして、そこに与えられている説明に、全的に頼ることにします。なぜなら、神がそれをご覧になりました。そして、神をあざむくことはできません。「人の悪が増大しているのをご覧になった」のです。この人とかあの人ではなく、少数の人だけではなく、また大多数に関してというのでもなく、人間全般として、普遍的な人間に関してなのです。その語は、全人類を含み、人間性を有しているものすべてを含んでいます。私たちにとって、その数を数え上げ、数千人とか数百万人とか言うことは容易なことではありません。当時、地球は多くの原始的な美しきや本来の生産性を保っていました。

大地の表面は、今のように裂けたり引きちぎられていませんでした。そして、春と夏が手を携えて過ぎていきました。ですから、現在養い得ると考えられている数の住民よりも、はるかに多くの住民を養うことができたと思われます。そして、人々が七百年や八百年の間共にいて、息子たちや娘たちを生んだのですから、それらの数は膨大であったに違いありません。しかしながら、この考えられないほどの数の人々の中で、ノアひとりだけが「主の心にかなっていた」（創６章８節）のです。彼だけが（たぶん、彼の家族のうちの何人かを含めて）世界中に見られる一般的な邪悪の中での例外でした。その邪悪さこそが、やがて間もなく神の正しい審判によって、全世界に破壊をもたらしたのです。残りのすべての者たちは、同じ罪責を負い、同じ罰を受けました。

2　「神は人の心に計ることをすべてご覧になった」。つまり、人のたましい、内なる人、心のうちにある霊、人のすべての内的外的な行動の原則、等の思いをすべてご覧になった

のです。神は、「心に計ることのすべてをご覧になった」のです。これ以上に広範囲を意味する言葉を見いだすことは不可能です。それは、内に形造られ、形成され、織り合わされているもののすべてを含んでいます。たましいの内にあるものや通り過ぎるものすべてです。すべての傾向性・感情・情熱・食欲・すべての気質・計画・思考です。結果として、それはその源から自然に流れ出るものとしてのすべての言動を含んでいなければなりません。そして、それらが流れ出てくる源の違いによって、善か悪かのいずれかになるのです。

3　さて、神は「すべてご覧になり」、そのことから、道徳的な清廉潔白さに反し、必然的にあらゆる善が含まれている神の御性質に反して、すべてが「悪いこと」であるのをご覧になりました。善悪の永遠的な標準である神の御心に反して悪だったのです。人間が創造された神の純粋で聖なる似姿に反し、また神がご自身の手のわざを見渡されてすべてのものが「非常によかった」（創世１章３１節）とご覧になったときに、人間のうちにあった神の似姿に反して、悪だったのです。正義、あわれみ、真理に反して、また各人が負わされている創造主と人間とに対する本質的な関係に反して、悪だったのです。

4　しかし、そこには善と悪が混在していたのではないでしょうか。光と暗やみが混じり合っていたのではないでしょうか。いいえ、決してそうではありません。「神は人の心に思い描くことのすべてが、ただ悪だけであるのをご覧になった」のです。多くの人々、おそらく全員の心の中に、善に向かう思いが植え付けられたことは、否定できないことと思います。なぜなら、その当時でも神の御霊は、もし人が悔い改めたなら、確かに「人のうちにとどまる」（創世記６章３節）こともしたからです、とあります。特に箱舟が準備されていた百二十年の恵みに満ちた猶予の期間があったのです。しかし、やはり「肉のうちに善は住んでいなかった」（ロマ７章１８節）のです。人のすべての性質は、純然たる悪でした。

その点で全く徹底していました。それと異なる性質は、少しも混在していませんでした。

5　しかしながら、それでもなお、「この悪には中断というものが無かったのか。どこかに明るく澄んだ部分がはさまれていなかったのか。その澄んだ部分に、人の心のなかに何か良いものが見いだされることがないのか」ということは探求されるべき問題です。私たちはここでは、神の恵みが必要に応じた機会に人のたましいのうちに働くかどうか（訳注・先行的恵みのこと）を考察しようと言うのではありません。そして、これを除外して考えると、人の心の悪に少しでも中断があったと信じる理由は何もありません。なぜなら、「人の心に計ることがみな、いつも悪いことであるとご覧になった」神は、それが常に同じ状態であり、「いつも、ただ悪だけ」であることをご覧になったのです。毎年、毎日、毎時間、毎瞬間そうなのです。人は少しも良い方向へと向かうことがありませんでした。

二

そうしたことが、全人類に関する確かな説明です。それは、人の心にあるものをご存知で、心を探り思いを調べる方（黙示２章２３節、エレ１７章１０節参）が、私たちを教えるた

めに記録に留めたのです。神が地上に大洪水をもたらす以前のすべての人は、このようなものでした。第二に、人間は今も同じかどうか調べることにします。

１　人間に関して何か別なように考えるべき理由を、聖書は何も与えていないということは確かなことです。それどころか、上述の聖書のみことばがすべて、大洪水の後の人間にも当てはめて言及されています。神がダビデを通して人の子たちについて「彼らはみな、真理ときよきの道から離れて行き、善を行う者はいない。ひとりもいない」（詩篇１４篇３節）と宣告したのは、その後一千年をはるかに越えたときのことでした。そして、このことに関しては、すべての預言者たちがそれぞれの時代において証言しています。イザヤは神の特別な民に関して（異教の民たちはもちろんそれより良い状態ではなかったことは確かなことです）、「頭は残すところなく病にかかり、心臓もすっかり弱り果てている。足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷」（イザ１章5〜6節）と述べています。同様の説明がすべての使徒たちによって述べられています。そればかりか、神のみことばの全体の毒も同様です。これらすべてから、私たちは神の恵みによって助けを得ていない生まれながらの人の状態に関して、「その心に計ることが」依然として「悪であり、悪のみであり」それも「いつも」そうであるということを学びます。

2人間の現状に関するこの説明は、日々の経験から立証されます。生まれながらの人が、それに気がつかないことは本当です。そして、そのこと自体は少しも驚くことではありません。光のないままで生まれた人は、ずっとそのままです。自分の欠けた状態に気がつくことはありません。さらに、もし全員が光のない場所で生まれたということを想像したなら、自分たちには光が欠けているということさえ気がつかないのではないでしょうか。同様に、人が生まれながら霊的な感覚のない状態にとどまっている限り、自分たちの霊的欠陥に気がつきません。特に、この霊的なことに関しては気がつかないのです。しかし、神が彼らの霊的感覚に光を与えるやいなや、彼らは自分のそれまでの状態に気がつきます。その後、彼らは「人はみな」、特に自分たちは、生まれながらに「全く空しいもの」であることを深く自覚します。つまり、自分たちが愚かで無知であり、罪と悪であるということを。

３　神が私たちの目をあけてくださると、自分たちがかつては、αθεοι εν τω κοσμω　ー「神もない人」、あるいは「この世にあって無神論者」であったことが分かります（エペ２章１２節）私たちは、生まれながらのまま（by nature）では、神に関する知識を持っていません。神との面識もありません。理性を使うようになるとすぐに、私たちは「被造物によって、神に関する目に見えない事柄、その永遠の力と神性」（ロマ１章２０節）を学んだ、ということは本当です。目に見えるものを通して、目には見えませんが、永遠で力に満ちた方の存在を推論しました。しかし、その存在を認めてはいましたが、依然としてその方との面識をもって知るということはありませんでした。個人的に知っているというのではありませんが、中国に皇帝がいるのを知っているように、全地の王である方がおられることは知っていました。しかし、依然として個人的には知らなかったのです。まさに、生来

の才能のいずれによっても、私たちがその方を知ることはできなかったのです。そのどれ一つも、神を知る知識を得ることはできませんでした。この目で神を見ることができないと同様､私たちの生来の理解力(by our natural understanding)では神を知覚することはできません。なぜなら、「子のほかに'父を知る者はなく、子が父を知らせようと心に定めた人のほかには父を知る者がありません。そして、父のほかには、子を知る者がなく、父が子を顕した人のほかには子を知る者がありません」(マタ１１章２７節参)。

4　ある古代の王のことを読んだことがあります。王は、人間の元来の言語が何であるかを知ろうと願いました。そのことを確かめようと、次のよう実験をしたとのことです。王は二人の幼児を誕生直後に、その二人のために特別に準備された場所に連れてくるように命じました。そこでは、二人は全く何の指示もされず、人間の声も一切聞かされずに育てられました。結果はどうだったでしょうか。もちろん,彼らがある程度成長したときその幽閉されていたところから出されたとき、全く何の言葉も話しませんでした。他の動物のように、何の意味もない音を発するだけでした。二人の幼児が、生まれるやいなや、同様に何の宗教的訓育も受けずに育てられたとしたら、(もし、神の恵みが介入しなかったなら)結果は全く同様の状態になることは、何の疑いの余地もありません。彼らは、宗教を持つことなどあり得ません。彼らが神を知るようになることなど、「野ろばの子」(ヨブ１１章１２節)や野にいる獣たち以上に可能性があるなど考えられません。伝統や、また神の霊の影響から引き離された自然宗教とは、その程度のものなのです。

5　何の知識もないのですからへ神に対する愛などあり得ません｡神を愛することはできません。知らないのですから。大多数の人々は'神を愛する代わりに神について語ります。そして、たぶん自分たちが神を愛していると想像しています。少なくとも自分たちが神を愛していないと認識している者はごく少数です。しかし、この事実はあまりにも明白で、否定できません。人はだれも生まれながらに神を愛することはありません。それは、生まれつき、石やその上を歩いている大地を愛するようにはならないことと同じです。私たちは、愛するものを喜びとし楽しみとします。しかし自然に神を喜び、楽しみと感じることなど私たちにはありません。生来の状態で人がどのようにして神を喜びとするようになるのかへ私たちには考えも及びません。私たちは、少しも神を喜びとはしません。

神は私たちにとって全-味気ないものです。神を愛することなど、はるか上のことで、私たちの視界には入っていません。私たちは生まれたままでは、それに到達することができません(詩篇１３９篇６節参)。

6　私たちの生まれたままの状態では'神に対する愛がないだけではなく、神に対する恐れもありません。ほとんどの人が、遅かれ早かれ「迷信」と相応な名で呼ばれている、非常識で不合理な種類の恐れを抱きます。ところが'エピクロス派の人々は、それを「信仰(religion)」(訳注・ルクレティウス、De Rerum Natura,110参)と呼ぶ過ちを犯しました。しかし、それとても生まれついてのことではなく、後天的なものです。主として、会話によったり、'実例を通したりして身につけるのです。生まれたままでは、「私たちの思いのどこにも神

はいない」(詩篇１０篇４節参)のです。私たちは、神は神で自分のことをやっていれば良いと放っておきます。神は天で静かにすわり、私たちは地上で好き勝手にするように放任されていると想像します。それで、私たちの心に神に対する愛がない（ロマ５章５節参）と同様に、私たちの目の前には神に対する恐れがありません（ロマ３章１８節参）。

7　このように、すべての人は、「この世にあっては無神論者」　（エペ２章１２節参）です。しかし、無神論そのものは、私たちを偶像礼拝から保護しません。この世に生まれ出たすべての人は、その生まれたままの状態で、全くの偶像礼拝者です。それはおそらく、その語の一般的な意味ではそうではないかも知れません。私たちは、いわゆる偶像礼拝をしている異教徒のように、鋳造したり彫刻したりした像を崇拝してはいません。木の切り株や自分たちの手で造ったものに向かって頭を下げて拝んだりしません。地上にいる聖徒たちに祈らないだからと言って、偶像礼拝とはならないのでしょうか。私たちは、「自分たちの偶像を心の中に秘め」（エゼ１４章２節）ています。そして、それらに対して私たちは膝をかがめ、礼拝するのです。それゆえ、あらゆる高ぶりは偶像礼拝です。それは、神にのみ帰せられるべきものを、自分自身に帰すことになります。高ぶりは人のために造られたものではありませんが、それなくして生まれる人などいるのでしょうか。しかし、この高ぶりによって、私たちは神の不可分の権利を奪い取り、偶像崇拝と同様に神の栄光を不当にも強奪します。

8　しかし、高ぶりだけが、私たちが生まれつき過ちを犯している偶像礼拝の唯一の分野ではありません。サタンは、自分のイメージを、私たちの心の中の自己意志（self-will）の分野にも印刻しました。「私はこうしよう」と、彼が天から放逐される前にサタンは言いました。「私は、北の果てに座ろう」　（イザ１４章１３節参）。私の創造主の御旨や喜びとは無関係に自分の意志と喜びを行おう。この世に生まれた人はすべて、同じことを言い、一千もの事例に際してそうなのです。それどころか、それを公言し、その事に顔を赤らめることもせず、恐れも恥もありません。その人に、「なぜこんな事をしたのですか」と問いなさい。その人は、「なぜなら、そうしようと思ったからです」と答えます。これは、ただ「それが私の意志だったから」ということです。つまり、結果においては、悪魔と私が同意したから、ということです。サタンと私が、私たちの行動を一つの同じ原理によって支配しているから、ということになります。一方、神の御心は、彼の考えの中にはなく、少しも考慮されていません。しかし、御心こそが天にあれ地上にあれ全ての理性的な被造物の至高の法則なのです。その原理は、全ての被造物がその創造主に対して負っているところの本質的で不変の関係に由来しているものです。

9　これほどまでに、私たちは悪魔のイメージを負っていますし、その足跡をたどっています。しかし、次の一歩で、私たちはサタンから離れ、サタンには責任がない偶像崇拝へと飛び込んでいきます。私が言おうとしているのは、この世への愛です。今やそれは、自分の意志を愛すると同様、すべての人にとって自然なことです。創造主の代わりに、被造物の中に幸せを探求することよりも自然なことが他にあるでしょうか。私たちには、神の

中にのみ見いだすことのできる満足を、神の御手によるわざの中に探求すること以上に自然なことは、他にあるでしょうか。肉の欲以上に自然なものがあるでしょうか。あらゆる種類の感覚の快楽への欲望以上に自然なものがあるでしょうか。人々、特に教育が高く教養のある人々は、これらの低俗な快楽を軽蔑すると、堂々と語ります。彼らは、滅び行く獣たちと同じレベルにあるそれらの欲求を満足させようということに、とらわれないふりをします。

しかし、それは単に見せかけです。なぜなら、全ての人間は、この点において自分自身が生まれつき獣であることに気づいています。肉欲的な欲望、しかもその中でも最低な種類のものが、多かれ少なかれ彼を支配しています。それらは、彼のうぬぼれていた理性にもかかわらず、彼を捕虜として引いていき、あちこちと引きずり回します。人は、その血筋や育ちがどんなに良-ても、またその他にどんなに才能があったとしても,山羊と比べても少しも優れてはいません。それどころか、動物が人よりも優れていないということは、大いに疑問です。確かに'現代の賢人の語りかけの一つに耳を傾けるなら、動物の方が優れている点があります。その賢人は、以下のように適切に語りかけています。

ある季節に一度だけ動物も愛を味わう
理性ある動物のみ　その奴隷となっている
そしてその愚かさの中に一年中隷属している

(Thomas Otway,The Orphan; or the Unhappy Marriage,ActV,sc.1)

人間の場合でも、素質や教育の違いから(先行的恵みによってなされたことを別としても)'個人個人の間でかなりの違いがあることを認めなければなりません。しかし、それにもかかわらず、自分自身について全-の無知でないなら、だれがここで最初の石を投げることができるでしょうか。私たちの恵み深い主による第七戒についての「情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」(マタ５章28節参)というテストに、だれが耐えることができるでしょうか。ですから'すべての人が自らの胸の内に感じている欲望によって打ち負かされている人々に関して、あれ程の軽蔑をこめて語る人々の、その無知さかごう慢さのどちらを一番驚くべきか分かりません。感覚的なあらゆる快楽への欲望は一罪のないものであれ、あるいはそうでないものであれ、すべての人の子にとって自然なものです。

10　また、「目の欲」　(Iヨハ２章１６節)も同様です。それは、想像力の快楽です。これらのものは、偉大な対象物や美しい対象物、また珍しい対象物などのいずれか―もしt先の二者が最後のものと一致しない場合にはIによって引き起こされます。なぜなら、たぶんそれは勤勉な探求の後には、偉大な対象物も美しい対象物も、それらが新しかったときほどには喜びとならないように見えるからです。また、それらの目新しさ珍しさが消え失せたとき'少なくともそれらが与える快楽の大部分は終わっているからです。また、それらが見慣れてくるにつれてそれらは次第につまらないものとなり、味気ないものとなっていきます。しかし、これをどんなにしばしば経験させたとしても、同じ欲望は依然として残る

でしょう。生まれつきの渇きは、たましいの中に留められたままで続きます。それどころか、それが満足させられればさせられるほどその渇きは激しくなり、そして次から次へと別の対象物を追いかけるよう私たちを扇動します。けれども、私たちはそれらの対象物の1つ１つを、実を結ばなかった空しい望みや惑わされた期待として通-過ぎていきます。まさに次のようです。

白髪の愚か者　多くの日々を
打ち続く悲しみと戦ってきた
自らの希望を新しくし　あさはかにも
明日に絶望的な賭けをする
明日がやってくる　昼になり　夜になる
今日もこれまでの日々と同じように飛び去っていく
しかし彼はなお続ける　喜びを探すことを
　明日こそと願いつつ　今夜彼が死ぬまで

(Matthew Prior, "To the Honorable Charles Montague",st.4,5)

11 世に対する愛というこの致命的な病､そ雛は私たちの性質に非常に探く根を下ろしているのですが、その第三の症状は、「暮らし向きの自慢」（Ｉヨハ２１章６節）です。これは、称賛を欲することであ-、「人からの栄誉」(ヨハ５章３節)を欲することです。人間性を非常に高く評価する人々は、これを断固として自然なものと認めています。視覚や聴覚と同様に自然であり、あるいは他のどの外部感覚とも同様に自然なものと認めています。それで、人々は、学者や洗練され向上された理解力を持っている人々でさえ、それを恥としていません。それどころではありません。彼らはその点に誇りを感じます。彼らは、自分たちが称賛を愛していることのゆえに、自分たちに称賛を送ります。それどころか、いわゆる高名なクリスチャンたちでさえ、空しい異教徒による古い格言であるAnimi dissolute est et Nequam negligere quid se hominess sentiant　訳注・キケロのDe Officiis,I,28,99からウェスレーがラテン語で意訳)を受け入れるのに､何の困難も感じません｡その格言は､｢人々が自分たちをどう考えているかを考慮しないことは、汚れた破廉恥な思いである」というものです。それで、「はめられたり、そしられたり、悪評を受けた-、好評を博した-すること」　(Ⅲコリ六8)　の中を平静に断固として通ることは'彼らにとってはまさに「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない」　(使徒２２章２２節)という人物のしるしです。しかし、こうした人々がかつてイエス・キリストやその使徒たちのことを聞いたことがあった、と想像するでしょうか。あるいは、彼らが、「互いの栄誉は受けても､神からのみ来る栄誉を求めないあなたがたは､どうして信じることができますか」　(ヨハ５章３節)と語った方がどういう方か知っていた、と想像するでしょうか。しかし、もしこれが本当にそうならば、つまり、もし私たちが「互いの栄誉を受け(求め)、神からのみ与えられる栄誉を求めない」限り信じることができない、そして結果として神を喜ばせるこ

とができないとなれば、全人類は何という状態の中にいることでしょう。異教徒もクリスチャンも同じです。なぜなら、彼らは皆「互いの栄誉」を求めているからです。自分自身を審判者としているのですから、そうすることが彼らにとって自然なことです。その自然さは'まるで目に当たる光を見たり、あるいは耳に入ってくる音を聞いたりすることと同様です。彼らは人々の称賛を求めることは徳の高い人のしるしであり、「神のみから来る栄誉」で満足する人を悪徳のしるしと説明しているのですから、当然です。

三

1　すでに述べてきたことから、私はい-つかの結論を引き出す方向に進みます。第一に、ここまでのことから、教理体系として考えられるキリスト教と最も洗練された異教との間の、７つの重大で根本的な違いを学ぶことができます。古代の異教徒たちの多くは、特定の人々の悪徳を主として措写してきました。その特定の人々の食欲や残酷さ、彼らの贅沢や放蕩に大いに反対して語ってきました。「あれかこれか'いずれかの悪徳もなしに生まれてくる人などいない」(Horace,Satires,I.iii.68)と大胆に述べる人もいました。しかし、依然、彼らのうちの誰一人として、人間の堕罪を把握していた者は、人間の全的腐敗を知っていた者はいませんでした。すべての人があらゆる善に欠けていて'あらゆる種類の悪に満たされていることを彼らは知りませんでした。彼らは、人間性全体が完全に堕落していることに関して全く無知でした。この世に生まれて-るすべての人が、そのたましいの全機能において'すなわち特定の人々のうちに支配的である特定の悪徳によってというのではなく'無神論と億像崇拝、ごう慢と自己中心'またこの世に対する愛という全般的な洪水によって人間性全体が腐敗しているということを、全-知らなかったのです。それゆえ、これこそが異教とキリスト教を区別する第一の、そして重大な相違点です。前者は多-の人が多-の悪徳に感染していること、そして'それらの悪徳への傾向性を持って生まれてくることさえ認めます。しかし同時に、ある人々のうちには悪徳よりも生まれながらの善の方がはるかに上回っているとも考えます。他方'後者は、すべての人が「罪のうちにみごもられ不義の中に形造られ」(詩篇５篇１５節)それゆえ、すべての人のうちには「神に対して反抗する肉の思い'神の律法に服従しない'否、服従できない肉の思い」(ロマ８章７節)があると宣告します。しかも、それがたましい全体に感染しているので、「彼のうちに、彼の肉のうちに」つまり彼の生まれながらの状態に「善が住んでいない」(ロマ７章１８節)なのです。だから、「全てその心に計ることがみな悪-」、しかも「悪だけ」で、それも「いつも」そうなのです。

2　そこで'私たちは第二に、それを(原罪)と呼ぼうと他の名称で呼ぼうと、上述のことを否定する人は全て、キリスト教と異教とを区別する根本的な点において依然として異教徒に過ぎない、ということを学ぶことができます。確かに彼らは、人間が多-の悪徳を持っていることを認めます。それらのい-つかは、私たちが持って生まれて-ることを認めます。その結果として、私たちは本来そうあるべき程には、それほど賢-も高潔でもな-生まれて-ることも認めます。また彼らの中にさえ、私たち人間が悪に向かう傾向性も善に向かう傾向

性も同等に持っているとか、誰も生まれながらにして創造されたときのアダムのように高潔で賢いなどと率直に断言する人は'きわめて少数です。しかし、ここに「シボレテ」(士師１２章４―６節)という試し言葉が存在します。人は生まれながらに'あらゆる種類の悪に満ちているのでしょうか。人は、あらゆる善に欠けているのでしょうか。全的に堕落しているのでしょうか。そのたましいは完全に腐敗しているのでしょうか。あるいは、初めの聖句に戻るなら、「その心に計ることがみな、いつも悪いこと」でしょうか。これを認めるなら、あなたはここまではクリスチャンということができます。それを否定するなら、あなたは依然として異教徒に過ぎないということです。

３　ここから、私たちは第三に、宗教の、それもイエス・キリスIの宗教の固有な性質が何かを学ぶことができます。それは、Θεραπεια φυξησ このように病んでいるたましいをいやす神の方法です。この方法によって、たましいの偉大な医者は、この痛をいやすために薬を与えます。薬を与えて、その全ての機能が腐敗している人間性を回復させます。神は、神ご自身を知る知識や、ご自身が派遣されたイエス・キリストを知る知識によって、私たちの全ての無神論をいやします。つまり、私たちに、神と神のことども！特に、キリストが私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった（ガラ２章２０節参）という重要な真理1に関する天的な証拠と確信である信仰を私たちに与えることによっていやします。悔い改めと心のへりくだりによって、プライドという致命的な病はいやされます。また、柔和と感謝にあふれて神の御心に従うという自己放棄によって、自己意志はいやされます。また、この世に対する愛に関してはその形態や分野がどんなものであれ、神に対する愛が最上の治療法です。

さて、「愛によって働く信仰」（ガラ５章６節）という、これこそが正当な意味で宗教です。それは、神のあらゆる御心とみことばに対して、愛と感謝に満ちた全幅的な服従と心からの遵守を伴って、この世に対して徹底的に死に、真実で柔和な謙遜を働かせることです。

4事実、もし人が、万一そこまで堕落していなかったとしたら、これら全ては必要とされないでしょう。心のうちにこのようなみわざ、つまり「私たちの心の霊において新しくされる」〈エペ４章２３節〉という必要はないでしょう。そうならば、「あふれる敬虔」の方が、「あふれる悪」（ヤコ１章２１節）よりもはるかに適切な表現でしょう。敬虔というものが少しもない外面的な宗教にとっては、あらゆる理性的な意図と目的で十分でしょう。そのような宗教は、私たちの本性の腐敗を否定する人々の判断では、それゆえ十分なのです。彼らは、宗教というものを、有名なホップズが理性を理解していたよりも、もっと理解していませんでした。ホップズによれば、理性とは単に「整然と並べられた一連の言葉」（Liviathan, I iv 12）に過ぎず、彼らにとって宗教は、まさにそのようなものです。そして、彼らは自分たちの主張を首尾一貫して以下のように語ります。もし内面が「悪であふれて」いないなら、もしそれがすでに清いなら、「杯の外側をきよめる」　（ルカ１１章３９節）ほかに何か残っているでしょうか。彼らのこうした仮定が正当なものである

としたら、外側の改革が、まさに必要とされる唯一のこととなります。

5　しかし、あなたがたは神のことばをそのようには学んできませんでした。あなたがたは、人のうちにあるものをご覧になる方が、自然と恵みに関して、また私たちの堕罪と回復に関して全く別の説明をしておられることを知っています。宗教の偉大な目的が、私たちの心を神のかたちに更新することであり、私たちの最初の祖先の罪によってこうむった、義と真のホーリネスの完全な損失を修復することにあることをあなたがたは知っています。あなたがたは、神のかたちに似せて創造された私たちのたましいが神のかたちに回復されるという目的に答えないような、あるいはその目的に届かないような宗教は全て、貧相な茶番劇や神に対する単なる軽蔑以外の何ものでもありませんし、結果として私たち自身のたましいを滅ぼすもの以外の何ものでもありません。そんなものをあなたがたにキリスト教とだましてつかませるような、そうした偽りの教師たち全てに注意しなさい。彼らが「あらゆる悪の欺き」　（Ⅱテサ２章１０節）、なめらかな言葉や上品さ、それどころか美しい言葉やエレガントな表現などとともに、またいかにもあなた方に対する真実な善意を公言しつつ、あるいは聖書に対する尊敬を表しつつあなたがたの所に来たとしても、彼らに心を向けてはいけません。平明で古くからの「信仰」にとどまっていなさい。かつて聖徒たちに伝えられ（ユダ2）、またあなたがたの心に聖霊によって伝えられた信仰です。あなたがたの病を知りなさい。また、いやしをも知りなさい。あなたがたは罪の中に生まれました。ですから、「あなたがたは新しく生まれなければなりません」（ヨハ３章７節）し、「神から生まれた者」（Iヨハ三9、ヨハ三8参）とならなければなりません。生まれながらにあなたがたは全的に腐敗しています。恵みによってあなたがたは全的に更新されます。「アダムにあってすべての人が死に」、第二のアダムである「キリストによってすべての人が生かされ」（Iコリ５章２２節参）ます。「罪過の中に死んでいた」あなたがたを「キリストは生かして」（エペ２章５節）くださいました。キリストはすでにあなたがたにいのちの原理、すなわち「あなたを愛しあなたのためにご自身をお捨てになった方を信じる信仰」（ガラ２章２０節参）を与えてくださいました。さあ、「信仰から信仰へ」（ロマ１章１７節）と「進む」（ヘブ６章１節）ように。あなたがたの全ての病がいやされ、「あなたがたの心構え」の全てが、「キリスト・イエスのうちに見られるもの」（ピリ２章５節参）となるまで進みなさい。